書　　評

ダッドレー・カーク稿「一つの新しい人口転換」

Dudley Kirk, "A New Demographic Transition ?"
Rapid Popnlation Growth-Consequences and Policy Implications, The Johns Hopkins Press, 1971, pp. 123-147

1. 本稿は，Study Committee of the Office of the Foreign Secretary National Academy of Sciences が Agency for International Development の援助の下に行なった研究成果の一つである D. Kirk の人口転換論である．

2. 人口転換，特に出生力転換の過程の究明は今日特に重大な研究領域である．それは，開発途上国の人口コントロールの成否は，出生力コントロールの成否にかかっているからである．また，日本人口の出生力転換が西欧文化圏外の最初のものとして，注目をあびてきたが，この経験を西欧文化圏外の例外的なものであるかどうかは理論的にも政策論的にも重大な意義をもっている．この点については K. Davis が北・西欧の過去における出生力転換と日本のそれとの詳細な比較分析によって Demographic multiphasic response の理論を展開し，日本の経験はまさしく西・北欧の response の，時期を異にしてあらわれた，拡大された繰返しであることを指摘した (1963)．Kirk の所論の注目される点は，出生力転換の世界史的経験の分析を通じて，文化・気候を超えて出生力転換の行なわれてきたことをあきらかとしていることである．

3. 一言でいえば，Kirk は，出生力転換における歴史的傾向の持続性をあきらかにしようとしている．高出生力から低出生力へのいろいろの段階にある国々が共存して新しい連続体を構成しているという．しかし，1950年代までは出生力転換を経験した国々と未経験の国々の2個のグループに分裂していた．前者は西欧文化圏の温帯地域のいわゆる先進地域であり，後者は非西欧文化国の熱帯地域の低開発諸国である．このような出生力転換におけるダイコトミーも1960年代において解消し始めた．それは，1960年代において出生力低下傾向を示し始めた低開発諸国が急速に増大してきたからである．

4. 歴史的にみると，低出生力パターンは北欧・西欧の中心部から南欧・東欧ならびにソ連へと波及していった．最近では，低出生力パターンが文化，気候の枠を超えてあらわれてきた．その先駆となったのが日本である．そして日本の周辺の諸地域に波及しており，またラテン・アメリカにもあらわれ始めている．世界における出生力転換は，著しく多様化した段階の国によって構成されており，そこに Kirk のいう連続性 Continuum がみられる．

5. 出生力転換と社会経済的変数との関係について，Kirk は，すべての開発途上国を対象として，一般的な傾向を求めようとすることは危険であるという．開発途上の重要な文化圏についてみても出生力と社会経済的変化との関係は一様でなく，あきらかに異なっている．出生力低下に対応する開発水準も異なっている．文化的背景を異にした多くの国々が出生力転換の段階にはいり始めており，その転換過程は欧州諸国のかつてのそれよりもはるかに早い速度で進行している．ここに，新しい人口転換がみられるというのが Kirk の観察結果である．

6. Kirk は最後に，新しいあるいは更新された人口転換があるのかと自問しながら，そのような兆候はあると自答している．そして，今日の一部の出生力転換の始まっている開発途上国では，都市化，教育，健康，マスコミそしてまた1人あたり所得において急速な発展が行なわれていると指摘し，そして出生力転換の兆候のまだみられない大国において近代化過程の進歩が続くならば，やがて人口転換が始まり，西欧の経験よりもはるかに早い速度で完成するであろうと，予測している．Kirk の所論は人口転換の新しい視野を開拓したものであるが，出生力転換のメカニズムの研究の必要性はいぜんとして残されている．

（黒田　俊夫）